

「西千葉イレブンプロジェクト」による まちづくりと商店街活性化 ―地域通貨「ピーナッツ」の新たな役割と可能性―

栗 沢 尚 志

要旨

本稿の目的は、2000年より地域通貨「ピーナッツ」を用いてまちづくりと商店街活性化に取り組んできたピーナッツクラブ西千葉が2014年度に実施した「西千葉イレブンプロジェクト」の背景や内容を紹介するとともに、地域通貨「ピーナッツ」のもつ機能が高度化していることを考察することである。

第1節では、文教地区である西千葉を活性化させるためには地域を「面」としてとらえ、まち全体を活性化する必要があった背景を述べる。第2節では、プロジェクトの内容を時系列的に整理している。第3節では、プロジェクトの成果をまとめている。最大の成果は、空き店舗の劇的な減少である。波及的な効果として、高校生や大学生のまちづくりへの参加も促進されたことをみる。最後に、地域通貨が競争や起業を刺激・促進する効果があることをみる。

キーワード

地域通貨、商店街、まちづくり、渋沢栄一、表の承認、裏の承認

1. 「西千葉イレブンプロジェクト」とは？：実施理由と背景

本稿が取り上げる「西千葉イレブンプロジェクト」とは、2014年度に全国商店街振興組合連合会（全振連）より補助金（地域商店街活性化事業助成金）を交付されて地域活性化事業を実施したプログラムの総称である。交付を受けたプロジェクトの実施主体は、ゆりの木商店街を中心に西千葉のまちづくりと経済の活性化を目指す任意団体「ピーナッツクラブ西千葉」である。補助金を使っ

たプロジェクトの実施により求めた目的は、①ゆりの木商店街の集客力のアップ、②ゆりの木商店街を含む西千葉というまちのにぎわいづくり、③空き店舗の解消、④商店街を支える若手および女性リーダーの育成、などであった。

この「西千葉イレブンプロジェクト」に先立ち、2013年3月から4月にかけて実施された企画が「ようこそ西千葉プロジェクト」であった。これは、ゆりの木通りを中心として「入学おめでとう ようこそ西千葉へ」と毛筆で書かれた黄色い30本ののぼり旗を、大学・短大・高校の入学式シーズンに立て、7つの学校が集積する西千葉で新たに学ぶ生徒や学生たちを地域全体で歓迎するという企画であった。栗沢（2014）で述べたように、のぼり旗に書かれた文字は千葉経済大学附属高校の書道部員によるものである。そして、のぼり旗の設置や、入学式当日にのぼり旗の前に立って入学式に向かう新入生やその保護者へ「おはようございます。ご入学おめでとうございます」との挨拶をおこなったのは、新入生の上級生となる千葉経済大学の学生たちである。この「ようこそ西千葉プロジェクト」をとおして、ピーナツクラブ西千葉と千葉経済学園との関係が深まっていった。後述するように、それは現在も深まりつつある。

地域通貨「ピーナツ」を用いたまちづくりと商店街活性化というピーナツクラブ西千葉の活動は、2000年から始まった。その活動のパートナーは、当初から千葉大学であった。地理的に、ゆりの木商店街と千葉大学とは（ゆりの木通りを挟んで）隣接している。それを象徴するのが、ピーナツクラブ西千葉が主催する「第三土曜市」である。商店街各店のみならず一般市民も出店して毎月第3土曜日に開催されるそのマーケットは、J R西千葉駅北口に近いふくろう広場で開催されている。運営は、千葉大学の学生を主体とするアミーゴプロジェクトがおこなっている。第三土曜市は、このように開催場所（ふくろう広場）と運営主体（アミーゴプロジェクト）の両者に関して、ゆりの木商店街と千葉大学とのいわば接点で開催されているわけである。第三土曜市のみならず、ゆりの木商店街と千葉大学との関係は人的にもきわめて深い。たとえば、千葉大学教育学部の藤川大祐教授が理事長を務めるNPO法人企業教育研究会

(ACE) のオフィスは、ゆりの木商店街の中の建物にある。ピーナツクラブ西千葉と千葉大学とは、地理的にも人的にも「一体化」してきたのである。

そして、千葉経済学園も文教地区である西千葉を構成する一員である。ただし、ゆりの木商店街と千葉経済学園との関係は千葉大学とは異なる。両者は直線距離で約500メートル離れている。町名も、ゆりの木商店街は中央区松波、千葉経済学園は稲毛区轟町と異なる。それゆえ、ゆりの木商店街と千葉経済学園との関係性は、明らかにゆりの木商店街と点や線で結ばれることでそれが十分に機能する千葉大学とは異なる。自明であるが、ゆりの木商店街と千葉経済学園との協働を進めるためには、轟町地区（＝千葉経済学園）と松波地区（＝ゆりの木商店街）を結ぶエリア、つまりその関係性を「面」ととらえなくてはならない。そのように、ピーナツクラブ西千葉は考えたのである。ゆりの木商店街と千葉経済学園の両者が協働して成果を上げる、換言すると両者が協働してWin-Winの関係となることのメリットとはなんであろうか？ 生徒や学生にとっては、地域で地域の人たちとともに実践的に学ぶというアクティブラーニングやPBL（課題解決型学習）という教育的メリットを享受できる、商店街にとっては、生徒や学生という顧客を獲得し売り上げアップという金銭的メリットへと結びつけられることであろう。それが、文教地区である西千葉の地域特性を踏まえた多くの事業者に共通した認識であり、中長期的には地域ブランドの向上にも役立つとピーナツクラブ西千葉は考えたのである。

要約すると、西千葉を「5つのブロック」から構成される面ととらえ、各ブロックにいる主体が（地域通貨「ピーナツ」に流れる基本思想である共助や利他の精神を持ちながら）連携して地域活性化に取り組もうとして着手された企画が「西千葉イレブンプロジェクト」であったのである。

2. 「西千葉イレブンプロジェクト」の内容

上述の5つのブロック（町名）と、そこに位置する活動主体（つまり西千葉イレブンプロジェクトへの参加者）は以下のとおりである。①松波町：美

容室MADOKA、まどか歯科医院・アミーゴケアマネージャー事業所、イタリア料理店壁の穴、ちゃんぽん料理店ぎやまん亭、セレクトショップGOD MOTHER、榎本畳店、カフェふくろう館、NPO法人けやきと仲間、②弥生町：千葉大学、③緑町：カフェバー呼吸、人材教育(株)プロシードジャパン、④汐見丘町：手作り革工房Jiro、⑤轟町：千葉経済大学、NPO法人コラソンスポーツクラブ、という計14の組織である。

これら14組織は地理的だけでなく、人的にも深い相互関係を持っている。ゆりの木商店街で中核をなす美容室MADOKA（海保眞氏）、壁の穴（木村保蔵氏）、ぎやまん亭（石川良和氏）、GOD MOTHER（鍵富マリ子氏）、榎本畳店（榎本英夫氏）に加えて、緑町の(株)プロシードジャパン代表の吉川亮氏はピーナッツクラブ西千葉の事務局長であり、手作り革工房Jiroの経営者である奥居次郎氏はピーナッツクラブ西千葉の副代表である。心の病を持つ人たちがくつろげる居場所であるけやきと仲間とピーナッツクラブ西千葉とは長年にわたり交流があり、理事長が千葉経済大学附属高校出身者であるコラソンスポーツクラブは千葉経済学園第2グラウンドを練習場として使用している。このように、西千葉が商店（営利）・NPO（非営利）・学校という3者で機能的にも地理的にもネットワークとして明確に連携していることがわかる。なお、この他にも、西千葉イレブンプロジェクトには参加していないが東洋理容美容専門学校はゆりの木商店街や千葉経済学園（特に短期大学部）との交流をもっている。

以下では、「西千葉イレブンプロジェクト」の具体的な内容を整理しておきたい。プロジェクトの2本柱は、①ピーナッツ市場（店名「じゃんけんぽん」）の運営によるゆりの木商店街への集客と活性化、②多様なイベント開催による西千葉地区の活性化（まちのにぎわいづくり）であった。これに、自主事業、つまり補助金の交付対象とならない事業として着手した地域交流型カフェ「ふくろう館」の開店とその後の経営が含まれる。

・ピーナッツ市場（店名「じゃんけんぽん」）

これは、2014年9月15日から2015年2月20日まで開設された地域交流スパー

「西千葉イレブンプロジェクト」によるまちづくりと商店街活性化 粟沢
スである。ゆりの木通りを歩く人たちが気軽に立ち寄れるよう、発芽酵素玄米
を使った「福八むすび」や「福八ごはん」、有機栽培野菜、南三陸町産わかめ、
壁の穴の手作りドレッシング、ファッション雑貨などの販売でまちのにぎわい
を高めると同時に、下記のようにイベント会場としても計8回使用された。



ピーナッツ市場（店名「じゃんけんぽん」）の概観

・イベントなどの開催

まちのにぎわいを高めるためには、人が集まることがきわめて重要である。
そこで、約6ヶ月にわたるプロジェクト期間内に絶え間なくイベントが開催さ
れた。それを時系列でまとめると、以下のようになる（各項目は開催日、イベ
ント名、場所の順に書かれている）。

2014年9月14日「キックオフ」、壁の穴

2014年9月15日「西千葉会議①」、壁の穴

2014年9月20日「ゆりの木コンサート①（マンドリン演奏会）」、壁の穴

2014年9月28日「介護相談会①」、じゃんけんぽん

2014年9月30日～10月1日「南三陸町への視察（出張）」、宮城県本吉郡南
三陸町

2014年10月18日「ゆりの木寄席」、ぎやまん亭

2014年10月18日「スポット（動画）ワークショップ①」、じゃんけんぽん

2014年10月18日「ゆりの木コンサート②（ジャズ演奏会）」、壁の穴

2014年10月20日「西千葉会議②」、壁の穴

2014年10月26日「介護相談会②」、じゃんけんぼん

2014年11月1日「語り部による南三陸町の今を語る講演会」、しんけみ広場

2014年11月2日「語り部による南三陸町の今を語る講演会」、じゃんけんぼん

2014年11月9日「コラソン千葉による子どもサッカー教室（大学祭）」、千葉
経済学園第2グラウンド

2014年11月9日「南三陸町復興支援わかめ販売（大学祭）」、千葉経済大学

2014年11月15日「スポット（動画）ワークショップ②」、じゃんけんぼん

2014年11月15日「ゆりの木コンサート③（マンドリン演奏会）」、壁の穴

2014年11月17日「西千葉会議③」、壁の穴

2014年11月30日「(株)レイビスパークによるおしゃれ教室①」、じゃんけんぼん

2014年12月15日「西千葉会議④」、壁の穴

2014年12月20日「ゆりの木コンサート④（ジャズ演奏会）」、壁の穴

2015年1月10日「西千葉会議⑤」、壁の穴

2015年1月18日「(株)レイビスパークによるおしゃれ教室②」、じゃんけんぼん

2015年2月11日「地域通貨「ピーナッツ」勉強会」、美容室MADOKA

2015年2月16日「西千葉会議⑥」、壁の穴

2015年2月21日「(株)レイビスパークによるおしゃれ教室③：ウエディング・



ピーナッツ市場（店名「じゃんけんぼん」）の店内

「西千葉イレブンプロジェクト」によるまちづくりと商店街活性化 粟沢

ドレス・パーティ 80」、じゃんけんぽん・ふくろう館

2015年2月21日「手づくり皮革製品教室」、じゃんけんぽん

2015年2月21日「ゆりの木コンサート⑤（ジャズ演奏会）」、壁の穴

2015年2月21日「感謝報告会」、壁の穴



ウエディング・ドレス・パーティ 80

・広報活動

西千葉地区の店舗や学校の位置を記した「ピーナツクラブ西千葉MAP」の作成、ピーナツ市場（店名「じゃんけんぽん」）に関する新聞折り込みチラシによるPRや店内に貼るポスターなどの作成、「西千葉Tシャツ」の制作、スポット（スマートフォンを使った動画）映像を商店街内店舗で放映、千葉経済大学の大学祭期間中に開催されたコラソン千葉によるサッカー教室や南三陸町復興支援のわかめ販売に関する「地域新聞」への広告掲載、4色（ピーナツクラブ西千葉の黄色、南三陸町の青、コラソン千葉の赤、千葉経済学園の紫）ののぼり旗の製作・設置、などによって地域住民へプロジェクトを広報した。

・自主事業：地域交流型カフェ「ふくろう館」の開店と経営

全振連からの補助対象事業とは独立して（つまり補助を受けない自主事業として）2014年9月に地域交流型カフェ「ふくろう館」をオープンさせた。中華料理店が閉店した以降およそ15年間も空き店舗となっていた場所を、ピーナツ

ツクラブ西千葉が店舗改装および備品の調達・設置などすべてを団体の自費でおこなった。そこには、延べ300名以上のボランティアが参加した。



コラソン千葉による「子どもサッカー教室」

3. 「西千葉イレブンプロジェクト」の成果

この「西千葉イレブンプロジェクト」の成果は明らかである。それは、空き店舗が劇的に減ったことである。全振連が全国の商店街へ補助金を交付した主目的もそれであるから、補助金を受けた目的が達成されたといえるだろう。具体的には、プロジェクト開始前にゆりの木商店街を苦しめていた空き店舗10店が、終了時点では1店にまで減少した。ゆりの木商店街の東側にあった空き店舗は、健康食品などを手掛ける㈱喜働によりデイサービスの「ちちんぷいぷい」として生まれ変わった。ぎやまん亭や壁の穴に並ぶ空き店舗は、いずれもが西千葉地域へは初出店となる屋台拉麵「一's (いちず)」、アパレルの「千葉Tシャツ.com」、タピオカドリンクの「caféBOBA」となった。これら4店は西千葉イレブンプロジェクトに参加するといった直接的な関与はなかったものの、㈱喜働はゆりの木商店街に本社を構える企業であるからピーナツクラブ西千葉との交流や情報交換はあり、他の3店もプロジェクトによって生まれたまちのにぎわいが出店理由の一因（おそらく間接的なインセンティブ）となったであろう。さらにプロジェクトの直接的な効果として、15年間も空き店舗であった

2店は、ピーナッツ市場（店名「じゃんけんぽん」）として半年間利用された場所へセレクトショップのGOD MOTHERが移転・入居し、もう1店は「ふくろう館」が引き続き地域交流の場としてカフェの営業を続けている。

このような物理的な変化・成果のみならず、人的なそれらも着実に生まれている。栗沢（2014）で紹介したゆりの木商店街の経営者たちを中心とする異業種経営研究会「起学塾」には、新たに上述の1'sや千葉Tシャツ.comのオーナーである若手経営者たちが参加した。千葉経済学園との関係も、さらに深まった。たとえば、木村保蔵氏（壁の穴）、海保眞氏（美容室MADOKA）、奥居次郎氏（手作り革工房Jiro）というピーナッツクラブ西千葉のリーダーである3名の経営者たちは、千葉経済大学附属高校の商業科3年生が取り組む課題研究（模擬株式会社の経営）において協力やアドバイスをおこなった。2015年4月から10月までの動きとして、次のようなものがある。ふくろう館における高校生たちによるビジネスアイデアのプレゼンテーションの実施、ピーナッツクラブ西千葉と親交のある化粧品販売の㈱レイビスパークにおいてハンドクリーム販売を計画した高校生たちによるヒアリング、スイーツ販売を計画した高校生たちはふくろう館と協力して梨を使ったマフィンを考案し、調理をふくろう館に委託した中で文化祭での販売、その後はふくろう館での販売など実践的なビジネス教育へと結びついている。千葉経済大学の大学生も同様である。たとえば、料理研究部はピーナッツクラブ西千葉と協働して「オリジナルどんぶりプロジェクト」を進めている。部員たちは、ふくろう館で販売することを念頭に置きながらオリジナルどんぶりを商品開発した。それを、ピーナッツクラブ西千葉の木村氏、海保氏、奥居氏らが試食し、3氏からの助言を受けて料理研究部は改良を加えた。改良を加えられたオリジナルどんぶりは、2015年10月開催の第三土曜市で販売された。今後、奥居氏のサポートを受けながら、大学祭での販売、その後、ふくろう館や大学キャンパス（学食）での販売へ進もうとしている。料理研究部の学生たちには、原価計算、販売価格の設定、販売戦略の策定、マーケティングといった自分たちのどんぶりを西千葉というマーケッ

トで売るための実践が求められていく。料理研究部の学生たちにとって、自分たちが学んだ知識の実践となる。ここに、地域連携がアクティブラーニングやPBL（課題解決型学習）といった教育と結びつくことがわかる。

4. 地域通貨「ピーナッツ」の新たな役割と可能性

ピーナッツクラブ西千葉は地域通貨「ピーナッツ」を用いたまちづくりと商店街活性化を目的とする組織であるから、本稿が取り上げた「西千葉イレブンプロジェクト」にみられるようなその活動の変化や高度化は、地域通貨「ピーナッツ」自体が持つ機能の変化ととらえることができる。

たとえば、西千葉地区の環境美化活動にボランティアとして参加して、ピーナッツクラブ西千葉から1000ピーナッツを受け取ったとしよう。その1000ピーナッツが持つ意味とは、1時間のボランティアがコミュニティにとって大切な意義をもった活動であると認める、換言すれば、個人に対するコミュニティからの積極的な評価・感謝といえるだろう。このような評価を、太田（2007）は〈表の承認〉と呼んでいる。一方、しばしば伝統的な日本社会では、組織や社会の秩序を守りながら奥ゆかしくふるまったり、義理を果たして周囲との調和を保ったりすることで認められようとする行動、つまり〈裏の承認〉と呼べる評価を得ようとする消極的な行動もみられる。太田（2007）が述べるように、〈裏の承認〉を求めるような行動は、画一性と調和を重んじるような農業社会や少品種大量生産の工業社会には適している。現代の産業構造は、明らかにそこから大きく変化している。独自性や創造性が求められ、ポーター（2000）が指摘するように差別化が競争優位をもたらすポスト工業化社会である。それにもかかわらず、現実には、モラルや規律の向上といった理由から〈裏の承認〉欲求がますます高まっているとも考えられる。そこで、地域通貨がもつ〈表の承認〉という機能が重要性をもつ。〈裏の承認〉欲求が高まれば高まるほど社会は停滞し経済は縮小してしまうが、伝統的競争社会で個人が持ちやすい〈裏の承認〉欲求がもたらす停滞や縮小を回避するために、地域通貨がもつ〈表の承認〉機

能を活かして、消極性へ陥った個人を競争社会で生き残れるように応援するといった機能である。いわば、地域通貨のもつ「福祉的」機能である。地域通貨「ピーナッツ」が、そのような福祉的機能をもつことは、ピーナッツクラブ西千葉のメンバーたちも15年間の活動を通じてすでに認識している。

ゆりの木商店街へ地域通貨の導入を勧めた都市計画を専門とする村山和彦氏（株みんなのまち社長）は、日本資本主義の父と称される渋沢栄一翁の思想「論語と算盤」と地域通貨のもつ機能との類似性に着目し、「地域通貨に流れる利他の精神・互助の精神は『論語』における「義」の精神であり、地域通貨がもつ地域経済の活性化や持続可能性の強化という目的は「算盤」にあたる」と述べている。渋沢翁の唱えた合本主義の現代的意義を考察した橘川・フリデンソン他（2014）では、論語と算盤という公益の追求と私益の追求は二律背反（トレード・オフ）にあるのではなく、両者はつねに表裏一体の関係にあると考えることが合本主義の本質であると述べられている。それを大胆に解釈するならば、経済活動において公益の追求と私益の追求という両者にはなんらかの最適な比率があり、その比率が安定的であること（つまり両者の均衡を維持すること）が健全な経済活動や企業経営を中長期的に持続するために必要であるといえるかもしれない。たとえば、その比率が5：5であったとしよう。経済のグローバル化で競争が激化して私益の追求が高まれば、公益の追求も同量だけ高まらなければならない。それゆえ、地域通貨を用いたコミュニティの持続可能性の向上が必要となるわけである。経済学的には、グローバル化がもたらす市場の失敗を地域通貨を用いた市民間の自発的取引による便益で補うと表現できるだろう。そこには、コースの定理にみられるメカニズムが働いている。

ここで注目すべきことは、もし私益の追求、すなわち競争による利潤追求行動を高めたのであれば、公益の追求を高めればよいということである。なぜならば、自明であるが、公益の追求と私益の追求とが一定のバランスをとることで、健全な経済活動や企業経営が「持続」できるからである。公益の追求はしばしば競争を阻害して効率性や生産性にネガティブな効果をもたらすといわ

れるが、渋沢翁の合本主義が歴史的普遍性をもつのであれば、市場での健全な競争は、新古典派経済学がいう規制緩和が刺激するだけでなく、競争とは相容れないと考えられがちな公益の追求からも刺激を受けるといえるかもしれない。そのような仮説に基づくならば、地域通貨「ピーナッツ」は、貨幣の地域内循環を高めコミュニティの活性化や持続可能性を高めるという機能（＝地域維持機能）や個人の利他的行動に対してコミュニティが評価を与えて自発的行動を促進するという機能（＝福祉機能）に加えて、公益の追求と私益の追求との均衡を維持させようとする個人の内在的動機から利潤追求や起業意欲を刺激するという機能（＝競争刺激機能）も有するといえるかもしれない。ピーナッツクラブ西千葉の場合、すでに(株)トライワープの虎岩雅明氏、(株)ころごし音楽工房の松尾貴臣氏、(株)プロシードジャパンの吉川亮氏といった3名の若手起業家を輩出している。このような事例をみるかぎり、地域通貨がもたらす顔の見える自発的取引とそこから生まれる信頼関係、そして信頼に基づく仲間たち（＝人的ネットワーク）が創出する情報や知識が与える波及効果は公益の追求を高め、それが高まれば起業や経営といった私益の追求が刺激されるといったダイナミクス（動態的変化）が生じるという仮説は、ある程度、現実を説明できるかもしれない。それが、本稿における考察から導かれる小さな発見である。

参考文献

- 栗沢尚志（2014）「西千葉におけるまちづくりの新戦略－「ようこそ西千葉へ」の経営学的解釈－」『千葉経済論叢』第50号：67-78.
- 太田肇（2007）『お金より名誉のモチベーション論』東洋経済新報社.
- 橋川武郎、パトリック・フリデンソン他（2014）『グローバル資本主義の中の渋沢栄一－合本キャピタリズムとモラルー』、東洋経済新報社.
- Michael E. Porter, *On Competition*, Harvard Business School Press, 1998.
- （竹内弘高訳『競争戦略論Ⅱ』ダイヤモンド社，1999年）.

（あわさわ たかし 本学教授）